

# 地竜の応用を考える

## — 糖尿病の治療を含めて —

中醫クリニック・コタカ 小高 修司

地竜の臨床応用として糖尿病や下肢の血行改善に用いた経験を持っている。まず始めに、古代本草書の地竜の薬効を見てみよう。

『神農本草経』の記述は以下の通りである。

白頸蚯蚓：味鹹寒。生平土。治蛇屨。去三蟲。伏屍鬼疰蠱毒。殺長蟲。仍自化作水。

『本草経攷注』（森立之、1857年）には「白頸蚯蚓」に関して以下の記述がある。

『本草和名』（深根輔仁 撰、918年頃）には白頸蚯蚓は訓じて「美美須」とある。『和名抄』には蚯蚓を訓じて「美美須」。白頸蚯蚓を訓じて「可不良美美須」とある。蓋し「美美須」とは、目見えずの義と謂う。「可不良美美須」とは、其の白き頸以上が頗る肥大して、蕪に似て菁根頭が有る故に白頸と名付けた。

『本草経集注』（陶弘景、500年頃）の記述は下記の通りである。

大寒、無毒。療傷寒、伏熱狂謬、大腹黄疸。一名土龍。生蜚谷平土。三月取陰乾。

ここでは、地竜の別名を土竜としているが、現代では土竜とはモグラのことを指す。

『薬性論』（甄權、隋・唐代）を見ると「一名地龍子、亦可單用。」とある。

『本草経攷注』の「白頸蚯蚓」の彼の案語に面白い記述がある。

此の物は専ら陰濕の氣を受けて生育し、日光を見ること纔かにして仆れる。故に能く血中凝固の濕熱を解し、因りて此の諸效を有するなり。

地竜使用症例を呈示する前に、現代日本で重要な意義を持つメタボ対策に触れておきたい。高脂血症を含めて糖尿病の治療で最も有効なのは「糖質制限食」である<sup>1)</sup> 西洋薬を使用しても血糖値のコントロールができにくい場合や、西洋薬の副作用で苦しんでいる場合、更に重要なのは糖尿病による種々の二次障害の予防・治療が必要となる場合に、漢方薬による治療の役割が高まると思われる。

周知の如く糖尿病による二次障害は多岐に渡り、血管障害のみならず神経障害や眼障害に対しても、「瘀血」の考えは重要であることが多い。とはいうものの活血化瘀にのみ目を向けることは誤りであり、あくまでも四診に基づき個々の患者の証を明らかにした上で、治法を考え用薬することは当然のことである。血や津液が気の推动作用により運行していることを考えれば、広く気・血・津液に配慮しなければならないといえる。

一般に糖尿病患者は気・血・津液全てが不足している、いわゆる気陰両虚であることが多い。更に現在の日本人は習慣的な冷飲食や過剰なクーラーの使用などにより「裏寒」状態にある人が多く、気虚から陽虚に進んでおり、結果として陰陽両虚と診断されることが少なくない。更に多飲により痰湿邪を併せ持っている。

私は以前、本誌に蘭草が糖尿病に有用であることを発表した<sup>2)</sup> が、近世の名医・施今墨の臨床経験に基づく『施今墨対薬臨床経験集』中の「益胃止渴健脾降糖類」に記されている対薬（生薬の組み合わせによる効果増強）は、日常使用しており、その有効性を確認している。そこには下記のような種々の組み合わせが挙げられている。

- 1) 蒼朮＋玄参：降血糖
- 2) 黄耆＋山藥：消除尿糖
- 3) 葛根＋丹参：降血糖、活血化癥

この他に、

- 4) 緑豆衣＋詭苡仁：健脾除脾湿
- 5) 玄参＋麦門冬：滋陰清熱除煩
- 6) 知母＋黄柏＋肉桂（＝滋腎通関散）：滋陰降火、瀉下焦湿熱＝腎消＝下消
- 7) 知母＋石膏：消口渴煩燥＝上消

これらの生薬の組み合わせをよく見ると、糖尿病本来の体質である気陰両虚、湿邪過多の状態のみならず、口渴多尿といった症状に対応できる生薬が多いことに気づく。

ただ多くの疾病に云えることだが、気・血・津液の量の不足をベースに持つてはいるものの、直接的な発病・発症は気・血・津液の流れの停滞によることが多い。しかも治療の順番はあくまで「先標後本」の原則に則り、「標治」つまり理気・活血・去湿といった流れの改善を先に行う必要がある。

また、当院では「降糖膏」を自製し、臍（神関穴）に1日5回程度塗ることで降血糖効果を確かなものにする方法も併用することがある。ただし臍は比較的かぶれやすいので、1回毎に前の軟膏をよく拭き取ること、入浴時によく洗うことを励行すべきである。神関は重要なツボであり、軟膏療法の効果はかなり高いと云える。上の対薬であげた生薬を粉末とし、適宜組み合わせでワセリンに混ぜ込む。なお、軟膏療法のポイントは少量を頻回に塗布する点にある。

では具体的な症例を例示し、実際の用薬法について考えてみよう。

職業上クーラーが強くきいた部屋に居住することが多く、さらに冷水を多飲するために、一般に見られる陰虚内熱よりも寒邪内襲による陽虚証が強い症例を呈示する。

**【症例1】** 74歳男性（1933年1月8日生） 160cm 73.5Kg

初診：2007年6月10日

主訴：視力低下、頸肩こり

現病歴：20数年前より糖尿病。以後断続的に西洋薬を服用してきたが、1月前より再開。

現症：今朝の血糖値は240。某医大の霊安室勤務。高脂血症は無いとのこと。

脈診：

|    |     |    |
|----|-----|----|
| 寸脈 | 関脈  | 尺脈 |
| 左滑 | 沈細滑 | 沈微 |
| 右滑 | 沈滑細 | 弱  |

舌診：舌質やや淡暗、舌苔白薄膩。舌裏の静脈の怒張有り。

指甲診：半月左3本、右4本だが全て小。

辨証：陰陽両虚、寒凝血瘀、脾虚湿蘊

治法：温陽散寒、活血化癥、健脾去湿

処方：1) 縮砂 15g、修治附子 3g、亀板 6g、瘰根 15g、丹参 9g、黄耆 15g、山藥 9g、沢瀉 18g、山蛭子 12g、炒甘草 4.5g 3x7T

2) 降糖膏 1個

第2診：6月20日 大便すっきり。

処方：1) 同前 3x14T

第3診：7月4日 階段の昇降が楽になった。血糖値も少し低下。昨晚多忙で睡眠時間少なかった。

脈診、舌診：ほぼ同前

処方：1) 熟地黄 15g、山萸肉 15g、修治附子 3g、癭根 12g、丹参 15g、玄参 9g、蒼朮 9g、黄耆 15g、山薬 9g、沢瀉 18g、小茴香 6g、焦山蛸 12g、炒甘草 4.5g 3x14T

2) 降糖膏 1個

第4診：7月18日 体調良し。腹囲減少。血糖値 200位。尿タンパク(+++)、血尿(-)

脈診：

|      |     |        |
|------|-----|--------|
| 寸脈   | 関脈  | 尺脈     |
| 左 滑細 | 細   | 沈細 (滑) |
| 右 滑細 | 沈細滑 | 沈細     |

舌診：舌質やや淡暗、舌苔白薄膩。舌裏の静脈の怒張無し。

処方：牡蛎 30g、黄耆 30g、炒地竜 9g、癭根 15g、丹参 15g、修治附子 4.5g、玄参 12g、蒼朮 12g、山薬 9g、沢瀉 18g、小茴香 6g、焦山蛸 12g、炒甘草 3g 3x14T

以後、同様の辨証施治を行い順調な経過をとった。

この症例は、この段の初めにも述べたように、多年にわたる風寒邪の侵襲と冷飲多飲に起因する寒湿邪の蓄積により、裏寒証、肺脾腎陽虚証となっている。冒頭の繰り返しになるが、通常の糖尿病では気陰両虚、特に陰虚内熱面が重視されることが多いが、現在の一般的な日本の生活習慣を考えた時、本症例のような陽虚・寒湿の鬱滞を主病理とする症例が、決して少なくないことを念頭に置いておかなければならないであろう。このことは糖尿病に限らず、多くの疾病において云える。特に「戴陽」や「格陽」といった、「真寒假熱証」を背景とした病態を理解し、対処していくことは、漢方薬を用いて臨床を行うに際し不可欠であろう。黄耆を地竜と配合することで益気化瘀させ、慢性腎炎を治療するという考えは江蘇省南通市の朱良春老中医に基づくが、師によれば黄耆は 30 ~ 60g、地竜は 10 ~ 15g を毎日用いることが必要とある。

次の症例は地竜を用いていないが、前記したのと別の生薬の組み合わせを用いているので提示したい。

【症例2】65歳男性(1941年3月14日生)

初診：2006年4月12日

主訴：糖尿病、白内障、脳梗塞を良くしたい。

既往歴：約20年前に肝炎で入院。

現病歴：約15年前より糖尿病といわれ、運動療法と経口糖尿病薬を服用している。

2005年2月23日 左白内障の手術したが、経過は良くなく、右目も進行状態にある。

2005年の夏、1~2日間の記憶消失発作があり、記憶力の低下も見られた。

HbA1c 6.6程度で推移。

現症：毎日日本酒1合かビール1本。大便は頭乾後軟。口渴多尿はない。霧視。

望診：口唇暗。鼻頭血管怒張有り。

脈診：

|   | 寸脈       | 関脈       | 尺脈    |
|---|----------|----------|-------|
| 左 | 滑、重按細    | 滑略弦、重按細滑 | 滑     |
| 右 | 滑有力、重按無力 | 滑、重按細    | 滑、重按細 |

舌診：舌質嫩暗胖、舌苔白帶淡黄、欠津。舌裏の静脈の怒張有り。

辨証：痰瘀互結、気陰両虚

治法：清熱明目、補気去湿、活血化瘀、滋陰消導

処方：枸杞子 12g、杭菊花 6g、玄参 12g、蒼朮 12g、黄柏 9g、癭根 15g、丹参 15g、黄耆 15g、山藥 15g、三稜 9g、莪朮 9g、山蛭肉 12g、炒甘草 3g 3x14T

併せて冷飲食の制限、糖質制限食の勧め、日本酒やビールを焼酎お湯割りに替えること、上手な気晴らしなどの生活指導を行う。

第2診（電話）：4月26日、第3診（電話）：5月9日 共に処方同前。

第4診：5月24日 低血糖気味、眩暈、多忙で疲れている。

脈診：

|   | 寸脈 | 関脈 | 尺脈 |
|---|----|----|----|
| 左 | 洪  | 洪  | 洪  |
| 右 | 洪  | 緊  | 滑細 |

舌診：舌質やや紅暗、舌苔白膩。舌裏の静脈の怒張有り。

処方：同前、加蘭草 9g 3x14T

夏至を越え夏の脈（洪脈）に変化している。

第5診：6月6日 先月末に血糖値（2時間値）97のため、**経口糖尿病薬**は中止になった。

処方：同前。

第6診：6月21日 HbA1c 6.1に低下。

脈診

|   | 寸脈    | 関脈   | 尺脈   |
|---|-------|------|------|
| 左 | 洪、按細  | 洪    | 滑、按細 |
| 右 | 洪、按無力 | 滑、按細 | 滑、按微 |

舌診：舌質やや紅暗、舌苔白膩。舌裏の静脈の怒張有り。

処方：1) 同前、去枸杞子、杭菊花。加乾地黄 15g、麦門冬 9g 3x14T

2) 牽皂丸 6g 2x14T

以後、安定した状態が続き、HbA1c 5.9 → 6.0 → … → 6.4 → 6.3 といった経過で推移。時々過労時に眩暈があるものの、大過なく経過していたが、2007年4月に緑内障の手術。その後も糖尿病は安定状態で経過していたが、妻が癌で死亡し、心労が重なり、帯状疱疹や前立腺肥大を経験。そのつど処方変更により対応してきた。例えば、上肢から背中にかけて帯状疱疹が出た時の処方（第52診：2007年10月18日）は、

処方：縮砂 18g、修治附子 6g、龜板 30g、黄連 3g、山帰来 30g、升麻 15g、三稜 6g、莪朮 6g、乳香 3g、没薬 3g、川牛膝 9g、桂枝 9g、炒甘草 6g 3x14T

である。龜板+黄連は劉炳凡老師の糖尿病に対する経験対薬である。この二味で糖尿病に配慮し、山帰来+升麻で清熱解毒を、三稜以下の活血薬で活血化瘀して、後遺症として残りがちな神経痛にも対処してある。

また、縮砂+修治附子+亀板は清末の名医・鄭壽全の『医理眞傳』（1869年）に見られる「潜陽丹」の加減方であり、腎陽虚による戴陽（別の云い方では真寒假熱）が、体表に熱邪（この場合は帯状疱疹）を生みやすくなっている状態のベースとなる証との認識に基づく配慮である。

それでは改めて現代の動物薬使用の大家である朱良春老師の経験を学ぼう<sup>3)</sup>。同書に見られる地竜の薬効は以下の通りである。

**効用：**(1) 泄熱定驚、(2) 行水解毒、(3) 平喘通絡、(4) 鎮肝降圧

**用治：**中風、痲疾、温邪高熱、黄疸、喉痺、哮喘、痺痛など

**用量：**一般煎剂 9～15g（多用酒洗、以て薬力増強）、丸散 1～2g

**臨床応用：**

1) 哮喘

(1) 姜春華經驗方：地竜 15g、海漳蛸 9g、天竺黄 9g。共研細末、毎服 1.5g、1日3回。益気培本、潤肺化痰薬を配合するとともに良い。

(2) 地竜、甘草粉等分。毎服 3～4.5g、1日3回

(3) 地竜、蒂躰子粉等分、毎服 3g、1日3回

2) 高血圧：陰虚肝旺、風火及び気血上衝による高血圧症に有効。高血圧のみならず頭目脹痛、煩燥不眠などにも効果有り。

3) 高熱驚臚譫妄

4) 癲狂：鎮肝降火に地竜を加えるも可、単独使用も可である。

5) 偏熱型の消化器潰瘍疾患：虚寒型の潰瘍疾患に用いれば病態は悪化する。

6) 流行性耳下腺炎

7) 下肢潰瘍、丹毒、閉塞性脈管炎による疼痛

以上の 4)～7) に用いる地竜は生体の物であり、それを砂糖と混淆することで滲出する体液を採取して患部に塗布するなどして用いる。

8) 関節炎、関節リウマチ：『太平聖恵方』の地竜散、『普濟本事方』（許叔微、1143年（宋代）の麝香圓などの用例。ちなみに麝香圓は川烏頭、全蝎、黒豆、地竜、麝香である。

9) 骨折、打撲損傷：止痛消腫作用有り。地竜末を水浮丸として山薬粉で衣にしたものを毎服 6g、1日1～2回服用。

10) 蕁麻疹：営血鬱熱によるものに用いる。地竜 9g、甘草 9g を煎服する。

11) 脳血管障害後遺症：構音障害、顔面麻痺などで、気虚血瘀、絡脈痺阻の辨証のもの。王清任の補陽還五湯にも地竜は用いられている。

#### 【文献】

1) 江部康二；“主食を抜けば糖尿病は良くなる！”，東洋経済新報社（2005）

2) 小高修司；蘭草を糖尿病に使う，伝統と医療，14（2），14-15（2008）

3) 朱良春 編；11. 地竜，“虫類薬的応用”，86-97，山西科学技術出版社（1994）